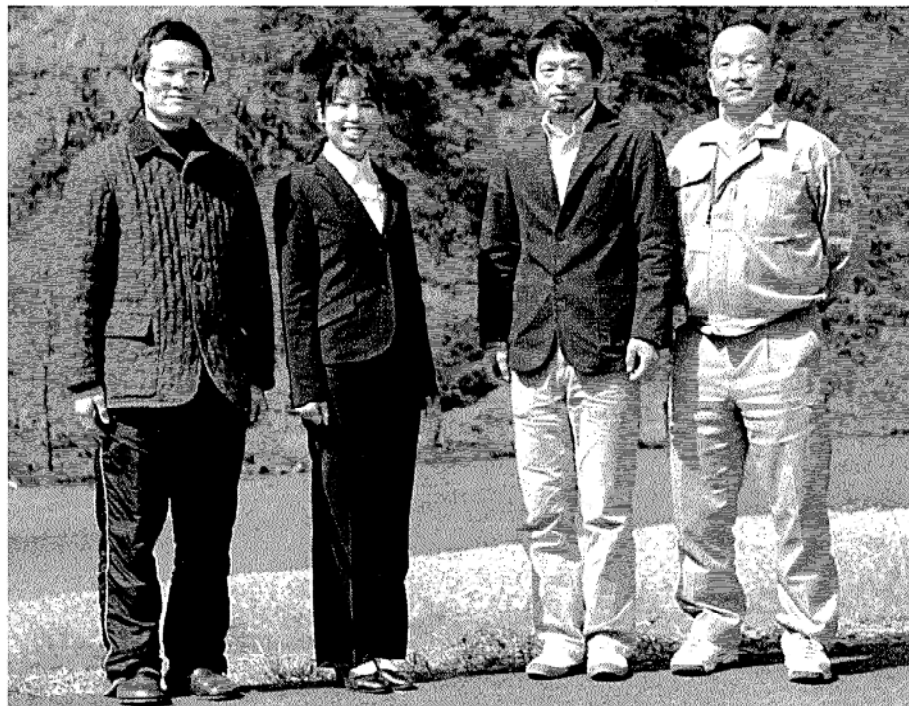


# 地域おこし協力隊

竹岡さん、大谷さんの原稿は「信州日報」本紙に掲載された記事を引用し加筆したものを掲載致しました。

## 新たに2名の隊員が着任

総務省と地方自治体が2009年度に新しい仕組みとして創設して以来、全国的に広がっている『地域おこし協力隊』。大鹿村では2010年10月より受入れを始め、これまで2名の隊員が活動してきました。そして、新たに2名の隊員が加わり、今年4月からは合わせて4人の隊員が活動しています。今回は新しい2名の隊員の紹介を中心にご報告します。



大鹿村で活動する4名の地域おこし協力隊員  
(左から) 永田さん、大谷さん、竹岡さん、高畑さん

## 木工で村を活性化

竹岡栄作さん(36歳)

4月1日付で大鹿村に地域おこし協力隊員として着任した。岡山県出身。子どもが好きなことから、ものづくりが好きだったと話す竹岡氏は、現在村が鹿塩地区にある過疎対策工場の跡地施設で整備を進める木工交流施設の管理運営を担う予定。村に豊富にある林産資源を活用し、訪れる人に木のぬくもりや、ものづくりの楽しさを伝えることを目指している。

故郷でははアパレル関連の仕事に就いていたが、木工を学ぶため退職。地元で職業訓練校で1年間学んだ。その後、雑貨の製造販売などを行う会社に勤務。その頃上司が村を訪れた際に木工交流施設の整備に関する情報を伝え聞いた。そして昨年夏に初めて大鹿村へ。田舎暮らしは嫌いではないし、何より、一から自分で作り上げることができると何が魅力だった」と、当時の思いを振り返る。その後、訓練校で知り合った当時婚約中の重理沙さんを連れて村へ。2人で大鹿村での生活を意識した。



夫婦で力を合わせて頑張ります！

木工交流施設では、木工教室などを企画し、村内外からの人々との交流を図り、将来的には村の雇用拡大にもつなげる狙いもある。4月には授産所等から機材を搬入し終え、夏頃の本格稼働に向けて着々と作業を進めている。

「まずは、カラマツを中心とした間伐材等の有効活用を考えたい。カラマツは家具の製造には適さないとされているが、県下には利用している先進地がある。大鹿独自の取り組みを発展させたい」と意欲を見せる。木工教室ではスプーンなどの日用品を作るところから始めたいと考えている。「休日や週末を使って村に来てもらい、何カ月もかけて机などの大作づくりにも挑戦してもらえれば嬉しい」と夢は広がるばかりだ。

## 先輩も一言



こんにちは！永田幸太郎です。

静岡県出身、協力隊2年目の永田幸太郎、35歳です。現在、上市場地区に家族5人(妻と子供3人)でお世話になっています。大鹿村に越してきてあっという間に1年が過ぎてしまいました。本年度は福祉のことと若者定住対策を中心に活動していきたいと考えています。これからもどうぞよろしくをお願いします。

## 村の農業を応援

大谷瑠里さん(23歳)

4月から大鹿村の地域おこし協力隊員になった。アルバイト先の業界新聞の社長さんの紹介で協力隊員に応募。若さと持ち前の明るさで村の活性化に一役買う。

出身は名古屋。先月まで信州大学農学部(伊那市)の学生だったが、大鹿村についてほとんど知らなかったという。ただ、両親は何度か村を訪れ、定年退職

後は大鹿村に住みたいと聞かされていたこともあり、「(村に)興味があった」と話す。協力隊員として村に身を置くことについては「(両親は)大賛成で送り出してくれた」(大谷さん)。担う仕事は、鹿塩にある農産物直売所「塩の里直売所」内で、農家の人たちが手塩にかけて育てた農作物などの販売が中心。今は、看板娘として認められても

らえるよう、農家の人たちの会話にも積極的に参加。明るい話し声が店内にこだまする。また、観光シーズンには、村のPRにも取り組むつもりだ。直売所店長の宮崎安子さんは「若い力に期待。明るくはきはきしているから、すぐ村に溶け込むと思う」と期待は大きい。大谷さんは「直売所はいろんな人と交流できる場。こうした交流を通して、村の農業を元気にしたいし、外から来た人には、村の良いところが伝えられるようにしたい」と意欲をみせている。



「塩の里直売所」でお待ちしています！

奈良県出身の49歳。一昨年10月から役場産業建設課にて地域振興のお手伝いをしています。早いもので、協力隊としての任期は残り11ヶ月です。村全体のPRをはじめ特産品作りや農産物、加工品等の販路拡大などお役に立てるよう精一杯走りまわります。



高畑真二です。最年長！

次号は7月発行予定です。